

座談会

地域社会に根ざした国際経営学部

- (語り手) 国際経営学部 国際経営学科教授
佐藤哲哉 関谷 忠 中山昭則
■ 司会 篠藤明德 (地域社会研究センター所長)

1 地域社会に根ざした学部づくり

篠藤

昨年、別府大学100周年を機に国際経営学部が設立されました。まず、学部長の佐藤先生から新学部設立の理念についてお話しただけでないでしょうか。

佐藤

別府大学には、現在、同学部に加えて文学部と食物栄養科学部があり、これまで100年をかけて果たしてきた地域貢献の業績はとても大きいと感じています。国際経営学部もまた地域貢献できる学部にしていきたいと考えています。

国際経営学部の設立に当たっては、高校や地域経済界など地元地域の要請について詳しく分析を行いました。こうした分析を経て、国際化の進む



地元社会の中で異文化に対応できる国際感覚を持った人材、そして零細企業から大企業まで経営に活躍できる経営能力を持った人材が強く求め

られていることが分かってきました。こうした地域の強い要請に私たちは応えて参ります。

よく、国際化、グローバル化といわれますが、そのときどういう地元の土台に立っているかが非常に大事なことです。その土台として、当然、経済もありますが、より広くは地域の文化に立ち、幅広く地域振興に寄与していくことが大事であろうと思います。

別府大学の教育課程の伝統として、例えば国語や英語、さらに韓国語や中国語などの語学・文学、また日本やアジア、ヨーロッパなどの歴史と文化について、幅広くかつ専門的に学べますね。これらの教育課程は、国際化する経済を考え、対応できる人材を養成していく上で、まさに下地となるわけです。別府大学の持っている広い知見的な基盤に立って国際経営学部での人材を養成していきたいですね。

それから、最近、別府市や大分県は外国人留学生の数が増え、全国1位になりました。これは地域の具体的な必要や支えがあって実現しました。私たちがどのように関わって、どういう教育を行い、どのような人材を育てていくかが問われています。例えば、すでに九州の経済界においても、「『国際化』という言葉はもう古い」といわれます。私たちの学部では、経済界と関わり、先端的な経済・経営に関する認識を磨き、その成果を反映させた教育を行っていくことが必要です。

地元の文化、経営能力の下地となる幅広い教養、そして経営に関する先端的な認識を備えた卒業生を地域に送り出すことが国際経営学部の使命だと考えています。

② ローカルな大学・学部ゆえの強み

篠藤

「国際化」というと非常にほんやりとしたイメージで語られがちですが、国際経営学部は「地域」の文化と具体的な実態と要請、そして別府大学の蓄積をふまえられて「国際化」に対応していこうとすることがよく分かりました。

ところで、関谷先生は、大分県の行政や経済の面でも地域に深く関わってこられました。その意味で国際系学部にかかる意気込みはとても強いものだと思いますが、国際経営学部がどのように地域に関わっていくかについてご意見をいただけないでしょうか。

関谷

今、佐藤学部長の話にありましたように、国際的な視野を持つことも大事だと思うのですが、やはり地域の文化や特性への視野を持つことが大事だと思いますね。ご存じの通り、日本は大都市中心の発展を追求してきましたが、他方で地域は非常に多くの問題を抱えるようになりました。その問題を解決し、地域が発展していくためには地域の持つ優れた文化や特性をいかにうまく活かしていくかが一つの大きな鍵になってきます。そのとき、「コミュニティビジネス」が一つのキーワードになるのかなと考えています。視点はグローバル、しかし自分たちの活動は地（域）に足をつけた活動を行っていく、このコミュニティビジネスのあり方を国際経営学部はまさに実践していこうとしているわけです。

その際、地域とどのように関わりを持つかということ言えば、様々な活動と学生が関わりを持つことが大事だと思っています。学生が地域のイベントや行事に参加する、またそうした活動への参加を大学の授業に組み込む、そこで学生自身の学ぶ意欲を高める、このような学部教育の仕組みづくりがこれからますます必要になってきます。また、企業へのインターンシップも必要です。今、企業ではどのような課題に直面し、どのように解決への道を模索しているのかを学ぶことがで

きます。

実はこうした取組みは、大都市の大きな大学ではなかなかできないことです。地域と深く連携した取組みは別府大学の国際経営学部だからこそ可能ではないかと考えています。



③ ローカルな活動が世界規範に

篠藤

今、国というナショナルなものが曖昧となり、地域の生活は国内関係というよりも国際的な関係に直結していこうとしています。こうした中で、先生のおっしゃるように、地域の個別具体的な特性に光を当て、価値あるものとして打ち出していくことが大事だと思います。例えば、別府には温泉がありますが、僕のドイツの友人に見せると彼は当然ながら驚きました。というのもドイツにはバーデンバーデンという温泉がありますが、とても規模が小さいですね。しかもそれが王侯貴族の保養地だと聞けば、別府市民なら詐欺じゃないかと思ってしまう（笑）。

ただ、地域の個別具体的な特性といったとき、何にどう光を当てるのか、その視点やコンテンツが問題ですよね。その意味で、中山先生は、地域の文化財についての研究と教育に長く携わってこられたので、そのコンテンツをいっぱいお持ちだと思うのですが、先生は国際経営学部でどのようにそのコンテンツをつくりたいとお考えですか。

中山

私は文学部の文化財学科に9年おりました。そこで学んだことですが、生意気な言い方をすると、「歴史は地域の遺伝子」のようなもので、「地域の文化遺産はその遺伝子をつくるDNA」では



ないかと強く思うようになりました。

文化財や地域の歴史についてそれぞれの地域と関わっていくうちに、それは農村が主なフィールド

になりますが、どうしても農村問題を考えざるを得なくなり、さらにそれをやっていると観光とぶつかっていかざるを得なかったわけです。そうしていくうちに、「観光は地域の栄養分なのかな」と考えるようになったわけですが、その時に国際経営学部へ移る話をいただきました。

先ほど、ローカルな活動が大事だという話がありました。私もそう思います。私なりに考えると、例えばイギリスが1970年代に英国病ということで病んでいましたね。その後、イギリスでは国レベルで様々な対策がとられました。つまり、ところ一番の対応策は各地域の個々の取り組みだったのであり、そうした地域の取り組みがその後の地域再生プログラムの世界規範となってきたと言えると思います。ですから、非常にローカルな活動は大事でして、例えば、別府の温泉も地域の活動によって世界の規範になるのかもしれない。そうした活動をリードする学生を育てたいと思っています。

4 生活上のふれあいから得られる教育効果

篠藤

確かに別府の温泉は、湧出量は世界第2位です。その大温泉地の上に12万人の人が住んでいます。熱海でも5万人近くの人口ですからね。もしかすると、別府が世界規範になるかもしれないわけですね。

ところで、先日のインタビューで学長がこれからの100年を考える時、これまでの文学部・食物栄養学部の実績や伝統をふまえて新しい国際経営学部をたてる、つまり小さな大学であるけれども人文・自然・社会の3つの足（3つの柱）が必要であるとおっしゃっていました。

そして、新しい国際経営学部は学科の中に「国際経営、会計・税理士、観光経営」の3つのコースができ、これまでの別府大学にはない新しい人材を養成されようとしています。新しいコースの人材育成についてはどのようにお考えでしょうか。

佐藤

コース制は既にその成果を発揮しています。税理士資格取得に関心を持つ学生に集中的に取り組みませ、明豊高校とそのための高大連携授業の仕組みを作りました。国際経営学部の3つのコースは、学生の立場から考えられています。一見すると、国際経営、会計・税理士、観光経営というコースは関連ないコースのように見えますが、実はこの3つのコースはバラバラではなくシナジー効果を得られるように設けています。というのも、学生はこれら3つのコースにあるカリキュラムを自由に選択できるようになっているからです。

当然のことですが、実社会の中では、例えば経営に携わる人で会計を知らない人はいないわけです。国際経営学部には確かにコースを設けているのですが、学生には自分で頭を絞り、自分の関心領域を見極め、そして広げ、深めていって欲しいと願っていますし、私たち教員もこの3つのコースのシナジー効果を高めていくように工夫して参ります。

それから、他の2学部ともシナジーが得られるような学際的アプローチを発展させていかなくてはならないですね。中山先生が「歴史は地域の遺伝子」とおっしゃいましたが、歴史や文化や言語など、他学部の科目を国際経営学部でもきちっと活かして学生がより深い知見を得られるようにしていきたいと考えています。

5 低年次演習でのきめ細かな指導の必要性

篠藤

先日、国際経営学部の教育についてお話を聞く機会がありました。国際経営学部には留学生がたくさんいますね。そして地域の中で教育をするときに、日本人の学生が共に町を歩く中で留学生に説明をする、逆に日本人の学生が気づかなかつたことを留学生が指摘するなど、とても面白い効果が出ているそうですね。学友をつくるという点でも国際経営学部には良い環境があると思います。先生方も海外で生活された先生がたくさんいらっしゃるわけで、そこで生活を通じたふれあいを教員と学生、また学生同士で重ねていく中で、シナジー効果が得られるのでしょうか。関谷先生は学生と地域との関わりについてどのようなお考えをお持ちでしょうか。

関谷

実際のところ、3つのコースには固い縛りがあると考えている学生も多いわけです。実は緩いんですけどね。ただ、そうであればこそ、1～2年生の教育カリキュラムを充実させていかなければならないと思いますね。3～4年生になれば専門教育が増えますから、楽しさが増します。ただ、カリキュラムの縛りが緩いからこそ、1～2年次のうちに、「こういう勉強をしたら将来こうなれるよ」というビジョンを示す必要があると思っています。

その一つの役割を担うのが1年生の「導入演習・基礎演習」ですね。そして、2年生では自分の専門をしばらくこんでいくために「発展演習」があります。その際、あまりにも選択肢が緩いと、実際には自分では関心のある専門領域を絞りこめない学生も出てくると思われしますので、基礎的な知識や技術を身につけることも必要だろうと思います。例えば、パソコンの操作、ファイナンスの基本である簿記、語学（特に英語）は国際経営には欠かせないですから、それら基本的能力を身につけつつ、ビジョンを示していく。そして、高年次ではインターンシップでより自分の課題意識を

深めていけるよう低年次の教育を細やかに行う必要があると思います。

篠藤

今年度から別府大学では、大幅にカリキュラムを変更しました。その一つの目玉が、1～2年次の導入・基礎・発展演習で、ここでは全人的な関わりを通して、勉学の意欲を育て、関心を深めることが目標になっていますね。その意味で、関谷先生がおっしゃるように、きめ細やかなゼミは強みになりますよね。

その点、中山先生は観光経営コースに関わっていらっしゃるわけですが、別府や県内の観光の力をどのように活かして教育を行おうとされているのでしょうか。

中山

学生と別府の調査を行っているところ、別府の観光もだいぶ変わってきたところがあるなと思っています。その一例ですが、鉄輪の湯治宿を調査していると、外国人の観光客がとて多くなってきたことに気づきます。ある湯治宿の人によれば、彼らはインターネットを通じて予約してきています。それで、外国人に聞いてみると、かなり別府のことが海外で紹介されているということでした。それから、九州各地もそうですが、これまでアジア系中心だったのですが、ヨーロッパからの観光客をよくみかけるようになりましたね。

そういう意味でメディアが世界規模でとて大きくなってきていると実感しています。情報が専門の榎本先生との立ち話をしたことがあります。海外からインターネットで別府を調べる時に、別府大学を經由して調べるような仕組みができないかなということも、今後は検討してみたいですね。

例えば、「ひょうたん温泉」がミシュランガイドに3つ星で紹介されましたよね。実はそのほかにも私たちから見たら全国各地で意外なところが紹介されています。その時、海外の観光客の視点から別府の良さを伝える情報を発信できないかと考えています。



6 教員・学生・地域の密な関わりをつくる

篠藤

中山先生は日本の温泉や農村の観光にも造詣が深い山村順次先生の弟子にあたられる方ですから、先ほどの鉄輪の湯治場の調査にしても、様々な学問的な背景をお持ちですね。それから中山先生ご自身の博士論文は農村景観をテーマに取り組み、グリーンツーリズムについてもご研究されています。そうした先生から見られて、やはり大分は宝の宝庫なのでしょうか。

中山

そう思いますね。その一つの理由ですが県が農泊にとっても積極的です。国の法律では認められなかった農泊を県が独自に条例をつくり実現してきた経緯があります。今では安心院をはじめ、県内各地でツーリズムが盛んになってきました。

また、以前、安心院でグリーンツーリズムに取り組んでいる方と話をしましたが、安心院のグリーンツーリズムで収穫された野菜を、別府の地獄蒸しで調理して食べ、温泉を楽しむという地域の取組みをつなぐことができたということも考えています。

篠藤

地域で活動されている実践者は、大分にはたくさんいらっしゃいます。また、そこに外部から多くの研究者が調査などで入りこんでいます。ただ、中山先生は地元の大分にお住まいで、地理や歴史などの学問的な背景を持って地域に入りこみ、かつ地域で活動しながら研究もなさっている。そういう意味で、中山先生のような先生はほ

とんどいらっしゃらないように感じますし、とても面白いと感じています。

国際経営学部には、他にも様々な学問的な背景を持った先生がおられ、地域に関わっていかれようとしているので非常に期待を持っていますが、いかがでしょうか。

佐藤

国際経営学部の教員には、様々な経歴、専門領域を持った教員がおられ、高い教育・研究基盤を形成しています。経済・経営・会計の先端的な研究、経営を高度化する情報通信技術、深い理解に基づく地域振興、国際的な経営の実践、長い海外生活を通じた異文化理解やカルチャー・マネジメントなど地域貢献に必要な知見が備わっています。税理士資格の取得支援も教員が直接担当し、個別セクター研究は地域の強い要請にこたえる農業、観光などもカバーしています。近隣の大学の経済・経営系の学部と比較して、専任教員の多さとその学位取得の充実度において勝っています。

ところで、私自身、国際経営学部が面白いと思うところは、個々の先生は異なる専門領域を持ちながらも、教育や研究について互いの意思疎通をはかっていけていますし、先生同士の関係が非常に良いということですね。

篠藤

先ほどのシナジー効果にもつながる話ですが、そういった意味で、やはり大学は建物がどうということではなくて、教員がいて、そこで学びたい学生がいる。つまり、教員自身の中身が大学の財産なのですね。

ところが、私が地域に関わってみると、地域は大学の教員を知らない。地域には個々の教員から芋づる式に他の教員も活かして欲しいですし、私

たち教員もそういう仕掛けをしていかななくてはならないだろうと思います。特に、別府大学のような小さな大学は、教員-学生-地域の人間的な関わり抜きには、誰にも相手にされないで衰える気がしますし、細やかで密な関わりは小さな別府大学だからこそできると思います。

そこで関谷先生にお尋ねしたいのですが、国際経営学部はどう地域との関係を築かれようとされていらっしゃるのですか。

7 地域のネットワーク・駆け込み寺としての大学

関谷

例えば、商店街は自分たちのお店のことだけを考えて生き延びられる時代ではなくなりました。そこで必要となってきたのが、「地域をどのようにしていきたいのか。その中で商店街はどのような役割を持っているか」というこれまでにない視点とその役割を果たすための「ネットワーク」なんですね。大分にはきらりと光る小さなものがたくさんある。それらは、これからのネットワークづくりの中で生きてくるだろうと思います。

ただ、実際にはそれぞれのお店は、日々の経営に追われ、それどころではないわけでして、そこに大学の役割が出てくると考えています。

篠藤

行政や商店、経済界も、個としては素晴らしいものを持っていても、ネットワークをつくれず、その素晴らしいものを発揮できない状況にある中で、今後、大学というのは地域のネットワークの役割を果たすべき、ということですね。

関谷

今までは、地域の課題に行政が直接関わろうとしてきましたが、今後、行政はシンクタンクとして一歩下がって、大学を引っ張り出して、大学も地域とより密に関わっていくことが大事だと思いますね。

地域と一緒にあって闘っていく、そのためにも教員だけでなく学生にもやる気と闘う道具（最低限としてパソコンや簿記、語学の能力）を持たせなければならないと思います。また、地域に出かけるだけでなく、大学にも地域を呼び込まなければならない。

篠藤

そうですね。確かに古いシステムの考えでは、地域の課題に対しては行政が包括的な網となってコーディネートの役を担ってきたわけですね。ただ、こうしたシステムでは解決できないし、弊害も生まれてきた。これからの国際経営学部、別府大学のあり方について、社会の側からより深く見直す必要がありそうですね。この点、中山先生いかがでしょうか。

中山

社会では様々な地域おこし活動が行われています。もちろん、地域には様々な宝があります。ただ、例えば別府は、温泉や観光が宝として注目されがちですが、実は明治以後、京都や東京などに次いで早期に優れた都市計画を作り上げたのです。つまり、別府の温泉や観光は、都市計画の歴史というものと深くつながっていて奥深いものです。そこから別府の今後を考えていくことも必要だと思います。

地域の困った時の駆け込み寺としての別府大学になっていかなければならないと思います。文学部、食物栄養科学部、そして国際経営学部ができ総合的な地域の駆け込み寺に別府大学がなれるといいですね。

国際経営学部の学生に望むことは、「グローバル化」と「環境」という概念を歴史・哲学的視点からも捉えてほしいということです。今日60億以上の人々が各地に住んで（分布して）いること自体がグローバル化の証です。しかし、これは実に10万年以上の時間の積み重ねによる結果ですよ。環境も地球はどんな経験を積んできたのか、例えば、気温が上下するバランスはどうであったのか？など・・・深い考察が必要となります。

「環境破壊」に対する警鐘は、実は1860年代にマーシュという人によって今日叫ばれている内容と全く同じものが提示されています。

これら二つの標語を表層的かつ感覚的に捉えないうで、幅広い教養の中で考察する人になって欲しいと思いますね。

篠藤

本日は、国際経営学部の理念とそれにかける意気込みについて、いろいろとお話を聞かせていただき、ありがとうございました。